

展示・收藏品より

# 美を知る

255

三河(現在の愛知県東部)で生まれた江戸後期の紀行家・菅江真澄(1754~1829年)が、初めて秋田を訪れたのは1784(天明4)年の9月末のこと。旧暦では晩秋、程なく冬を迎える頃であった。現在のにかほ市、由利本荘市を経て、羽後町、湯沢市方面を目指した真澄は、道中、雪の洗礼を受ける。

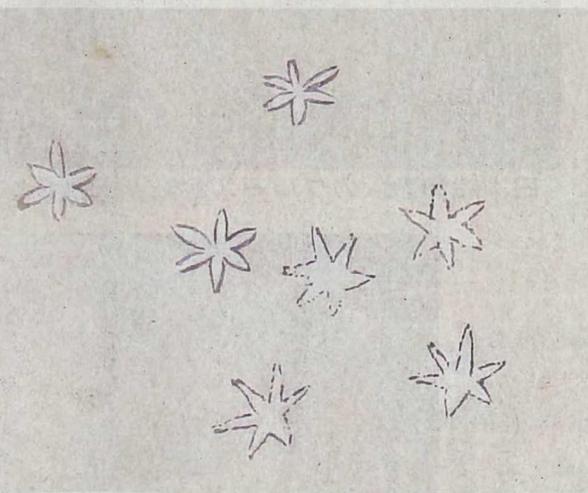
## 菅江真澄と雪の記録

# 趣捉える鋭い観察

十一月半ば。湯沢に行く。雪が六尺ほど(約180センチ)の高さまで積もっている。子どもたちが「はぎざり」という細い板木を二本履いて、軒ひさしの上から何度も滑って遊んでいる。

十二月半ば。「大雪や窓から見ゆる人の足」と誰かが詠んだ句があったが、本当に高窓の上に行き交う人の藁ぐつが見える。子どもたちは「かまくら」であそぶと言って、家よりも高く積もった雪に穴をあけ、中に火を灯してさまざまなことを語って一夜を過す。早朝の雪景色は、美しい花を眺めるにも勝る。遠くの山など例えようがない。

(前出、筆者意訳)



④「浦の笛滝」(県立博物館蔵写本)より 18.7センチ×13.3センチ  
⑤左下の雪の結晶の拡大図

図2

十月七日。みぞれが降り、舟が出せないと言われた。そのうちにみぞれは雪に変わる。往來の道も絶え、足止めされる。煩わしい。

十月十日。雪のせいで道が絶えたが、舟で川を渡り、別の道を探して雪をかき分けて進む。粗末な橋の上に雪が積もって渡りがたい。見るのも恐ろしい勢いで流れる谷川の上を、人に助けられながら、かろうじて渡る。雪の中を進むうちに誤って道に迷う。通りがかった越中(富山県)の薬売り

二人組を頼りに進む。(日記「秋田のかりね」より、筆者意訳)

旧暦の10月上旬は、現在の11月中旬に当たる。真澄の行く手を阻んだのは、その年の初雪であつたらうか。また屋根からの落雪は雪国でしか起こらない現象だ。三河生まれの真澄にしてみれば、地震と勘違いするほど、大いに肝を冷やしたことだろう。さて、当初こそ雪の存在を疎ましく感じた真澄ではあったが、徐々にその魅力にも気が付いていく。

子どもたちが雪遊びを楽しむ様子や、雪が降ったからこそ見られた趣深い光景など、秋田の人々が雪を受け入れ、雪とともに暮らす姿が、真澄に雪の魅力を伝えてくれた。図1は旅の初期の写生帖「粉本稿」に描かれた「かまくら」の図絵で、日記の内容に相応する。家の軒近くまである巨大なかまくらの中には、灯火

が二つ灯され、20人ほどの姿が確認できる。真澄はまた異なる視点からも雪について記録している。1804(文化元)年1月、現在の北秋田市で描いた図絵(図2)には、次のような説明文が付されている。

「むつのはな」が降る日もあれば、降らない日もある。はらはらと降る「はだれ雪」に入りまじって降ることが多い。鏡に映して眺め、実際の大きさのまま図絵に描く。なるほど、「六花」「六雪」の名で呼ばれるのも納得がいく。朱塗りの器を差し出して見れば、

寒さが厳しい時は完全な六つの花びらで、寒さが緩むと五つの花びらのものも交じっているようだ。(日記「浦の笛滝」より、筆者意訳)

真澄が「むつのはな」として図絵に描いたのは「雪の結晶」である。「六花」の名の通り、六つの花びらがあるように見える特徴をよく描いている。鏡に映して観察したのは、自身の息で溶けないようにするため、また朱塗りの器は、より良く見えるように背景色として利用したのだろう。

雪の結晶は現在、六角柱(六角形)をベースとして形成されることが知られているが、そのことを真澄は鋭い観察眼で正確に捉えていた。記録者・真澄は科学的なアプローチからも雪について迫っていた。



図1

「粉本稿」(県指定文化財「菅江真澄著作」の1冊)より  
23.6センチ×16.5センチ 大館市立栗盛記念図書館蔵

又も 県立博物館菅江真澄資料センターでは、コーナー展「真澄が記録した鹿角郡」を5月12日まで開催。観覧無料。開館時間は、午前9時半~午後4時(4月1日からは4時半まで)。月曜休館(休日の場合は翌平日)。同館☎018・873・4121

今冬、県内は例年にないほど雪が少なかった。そのせいもあってか、真澄の雪の記録を見ているうちに、無性に雪が恋しくなりました。除雪などで大変な思いをするのも多いが、改めて雪は美しいものだ、と。われながら都合の良い話である。(県立博物館学芸主事・角崎大)